

公益社団法人日本薬剤学会 2025 年度事業計画

(2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日まで)

はじめに

1985 年に任意団体として設立された本学会は、2015 年に創立 30 周年の節目の年を迎えた。この間、2006 年に文部科学大臣より社団法人としての設立認可を、2012 年には内閣総理大臣より公益社団法人としての移行認定を受け、科学の発展とともに社会貢献を目指した活動を行うことが求められている。本学会の事業は定款に定める以下の各事業を総称して「薬剤学及び関連諸領域に関する情報提供及び啓発、研究の振興、調査研究並びに評価により、薬剤学の進歩とその成果の利用普及を図る事業」として認定を受けており、理事会は別紙に詳述するこれらの事業を、公益法人としてのガバナンス体制の下に実施する。

- (1) 学術集会、研修会、講習会等の開催
- (2) 機関誌、学術雑誌、その他出版物の刊行
- (3) 研究の奨励及び研究業績の表彰
- (4) 国内外の関連学協会等との連絡及び協力
- (5) 研究及び調査
- (6) 薬剤学に関する学識及び技術等の認定
- (7) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

基本方針

- 1 公益社団法人へ移行後丸 13 年を経過し、特に引き続き財務面、ガバナンス面での確固たる体制の整備に注力するとともに、代議員制の定着を図る。
- 2 日本の薬剤学に関するサイエンスレベルの向上を図るとともに、新規医薬品の開発及び医療現場における医薬品の適正使用への取り組みを推進する。
- 3 医学・工学をはじめとする関連諸領域との連携をより緊密なものとし、学際的な研究協力を推進することによって、製剤・DDS 等における新しい技術開発に積極的に参画する。
- 4 産官学一体となった活動を通じ、医薬品の有効性と安全性を担保するための規制上の問題に関して公益的な立場から提言を行う。
- 5 薬剤師の職能の向上を目指して、国際標準的な医薬分業を推進する。
- 6 学会活動の国際化を目指して、FIP (International Pharmaceutical Federation, 国際薬学連合) などの国際学会および他国の薬剤学関連の学会との協力体制を構築する。
- 7 薬剤学の知識・技術を基盤として、機能性食品や化粧品などの開発、適正使用への取り組みを支援する。
- 8 2010 年度より発足した製剤技師認定制度の社会的認知度を向上させるとともに、各企業への製剤技術の普及・伝承に注力する。
- 9 共通の研究目的等による分野横断的なユニットであるフォーカスグループによる活動を強化する。

公益目的事業 1「薬剤学及び関連諸領域に関する情報提供及び啓発，研究の振興，調査研究並びに評価により，薬剤学の進歩とその成果の利用普及を図る事業」

会長（楠原会長）

- 1 APSTJ 2025 推進事業
 - 理事会主導により，日本薬剤学会のこれからのあり方“APSTJ 2025”の検討を行う。
 - 国内外の関連学協会との交流事業を推進する。
- 2 国際標準医薬分業推進事業
 - 国際標準的な医薬分業（完全分業あるいは強制分業）への移行について，必要な情報を整理しつつ，実施に向けての戦略を立案し，関連団体と連携しながら行政への働きかけを推進する。

副会長総務担当理事（武田副会長）

- 1 学会賞等表彰事業
 - 学会賞選考委員会
 - タケル&アヤ・ヒグチ記念各賞選考委員会
 - 理事会の推薦，決議
 - 1.1 薬師メダル
薬剤学分野の科学・技術と薬剤師職能を統合化したシステム薬剤学に関して，卓抜した業績を有する者を理事会の推薦により表彰する。
 - 1.2 学会賞
薬剤学，製剤学，製剤技術並びに医療薬剤学の発展に関し卓抜した業績を有する者を表彰する。
 - 1.3 功績賞
本学会の運営・発展への貢献，薬剤学教育への貢献，薬剤学，製剤学，製剤技術並びに医療薬剤学の振興への貢献を行った者を表彰する。
 - 1.4 奨励賞
薬剤学，製剤学，製剤技術並びに医療薬剤学の基礎及び応用に関し，独創的な研究業績を挙げつつあり，これらの分野の将来を担うことが期待される若手研究者を表彰する。
 - 1.5 タケル&アヤ・ヒグチ記念荣誉講演賞（西暦偶数年度に実施）
故タケル・ヒグチ教授の薬剤学・製剤学分野における学問上，教育上，医療上並びに医薬品工業上の発展に対する偉大な功績，更に故アヤ夫人の功を記念し，同記念荣誉講演の講師を表彰する。
 - 1.6 タケル&アヤ・ヒグチ記念賞（西暦奇数年度に実施）
薬剤学・製剤学分野における学問上，教育上，医療上，医薬品工業上の発展に顕著な功績を挙げ，受賞を励みにして更なる活躍が期待される者を表彰する。
 - 1.7 創剤特別賞
国際的に特に顕著な評価を受けた有形・無形の創剤を創成した者を臨時に表彰する。
 - 1.8 優秀論文賞
機関誌「薬剤学」及び公式欧文誌"Journal of Drug Delivery Science & Technology"に掲載された優秀な論文の著者を表彰する。
 - 1.9 製剤の達人称号
医薬品製剤技術の研究開発に長年にわたり従事し，高い技術を確立した者を表彰する。
 - 1.10 国際フェロー称号
薬剤学関連領域で国際的に特に顕著な業績を上げた会員，本学会の国際賞を受賞した外国人研究者等を表彰する。
- 2 創剤開発・研究賞表彰事業
 - 旭化成各賞選考委員会
 - 2.1 旭化成創剤開発技術賞
国際的な製剤の品質に関する考え方の変貌に応える製剤・創剤開発の基礎及び応用に関するハード及びソフトの優れた研究を対象として表彰する。
 - 2.2 旭化成創剤研究奨励賞
製剤の機能化，最適な投与方法とそれに合った剤形開発，製剤の処方研究によって目標とする新規製剤の開発に顕著に貢献した者を対象として表彰する。

渉外担当理事（小暮理事）

1 学生主催シンポジウム事業

- SNPEE2025 実行委員会

薬剤学に関わる学生の研究室・大学間を超えた活発な交流と、口頭発表能力やシンポジウム運営のノウハウの涵養を目的として、日本薬剤学会第40年会において学生主催シンポジウム「SNPEE2025*」（「“Co-creation and Innovation for development of new modality in pharmaceuticals~新規創薬モダリティ開発に向けた異分野共創と技術革新”」）を開催する。講演者自身の研究テーマに関する革新的技術の基礎から応用例までを紹介するとともに、異分野融合による新しい創薬に向けた提案についての講演を予定する。本企画を通じて薬剤学的視野を広げるとともに、多彩な薬剤学以外の研究分野との融合から革新的創薬の開発を加速する機会の提供を目的とする。

*SNPEE: Student Network for Pharmaceutical Education and Evolution

2 広報委員会事業

学会ウェブサイトの企画運営等を通して本学会の活動の広報を行うとともに、会員の拡大のために関連諸領域の研究者への本学会のアピールを図る。また、毎月ニューズメールを配信し、イベント情報や最新情報を会員に届ける。「薬剤学」誌の編集委員会および他の学会内組織と連携し、ウェブサイトからの情報発信を活性化させる。

3 医薬品の包装と情報分科会事業

薬剤学を支える包装・情報に関し、専門の研究者・技術者が協議し、本学会会員に情報発信を行うことを目的に、40年会において医薬品包装シンポジウム「Patient-centric な医薬品包装を志向した臨・産・学・官の取組み」を開催する。

4 教育分科会事業

薬剤学に関わる教育問題について、専門委員が協議して提言を行うほか、教育資料の企画、年会における「薬学教育シンポジウム」（2025年度のシンポジウムタイトルとして、「Takeru and William I. Higuchi 兄弟の御業績とわが国の薬剤学への貢献(仮)」を予定）を企画実行する。薬剤学に関わる教育問題について、専門委員が協議して提言を行うほか、教育資料の企画、年会における「薬学教育シンポジウム」（薬学コア・カリキュラム改訂：薬剤師教育における薬剤・製剤教育の進む道）を企画実行する。

国際連携担当理事（西川理事）

1 英語セミナー事業

国際共通言語である英語での討議能力を養うため、訪日した海外研究者・国内の研究者または英語教育専門家等を講師として招聘し、講演・ディスカッションの全てを英語で行う Global Education Seminar を企画する。全国の大学・企業・研究機関から多くの学生・若手研究者が参加することを期待して、年に2回オンライン開催する。留学生をはじめとした外国人研究者にも参加を促し、外国人参加者と日本人参加者の比率が半々となるようなグローバルなセミナーを目指す。

2 国際学会等協力事業

- FIP（国際薬学連合）

FIPのPredominantly Scientific Member Organisationとして、Council Meetingで重要事項を審議する他、Section/SIGにメンバーを派遣する等、BPSの諸活動に参画する。また、FIP Educationや次回PSWCの会議に参画し、会員の参加を奨励する。

- AFPS（アジア薬科学連合）

次回は2025年にSydney, AustraliaにおいてConference AFPS2025が開催される。Conference AFPS2025に派遣する講演者について検討する。

- 第5回日韓合同薬剤学若手研究会

第5回日韓合同薬剤学若手研究会（2025年韓国開催予定）に向けた対応を協議する。

機関誌担当理事（米持理事）

1 「薬剤学」編集委員会事業

「薬剤学」誌の企画編集と薬学を学んでいる若い学生を対象にした「薬と健康の週間」懸賞論文の選考を行う。

2 投稿論文審査委員会事業

「薬剤学」誌への投稿論文の審査と、優秀論文賞の選考を行う。

3 学会誌出版事業

3.1 機関誌「薬剤学」

「薬剤学」編集委員会の担当する依頼原稿と投稿論文審査委員会の審査による一般論文で構成される「薬剤学」誌を以下のとおり発行する。

Vol. 85 No. 2 2025年4月1日発行

Vol. 85 No. 3 2025年7月1日発行

Vol. 85 No. 4 2025年10月1日発行

Vol. 86 No. 1 2026年1月1日発行

英文論文の受け付けも可能であり、積極的に英文投稿の促進を図る。

3.2 公式欧文誌「Journal of Drug Delivery Science and Technology」

Vol. 106 (2025年4月)～Vol. 117(2026年3月) の計12巻をオンライン発行する。

技術・書籍担当理事 (小島理事)

1 製剤技術伝承講習会事業

- 製剤技術伝承委員会

製薬企業各社でのアウトソーシングの加速により、滅失が懸念されているわが国の製剤技術を次代の製剤研究者・技術者に継承するため、座学・実習の講習会を企画運営する。更に製剤の達人称号の選考も行う。今期の開催予定は次のとおり。

1.1 第34回シミック製剤技術アカデミー／製剤技術伝承講習会

「経口製剤・非経口製剤の製剤設計と製造法」

2025年6-8月に3回に分けて開催予定 会場：名城大学（未定）

1.2 第27回製剤技術伝承実習講習会

「難溶性薬物の物性評価ならびに製剤設計」または「製剤設計の基盤となる化合物の物性評価」

2025年8-9月頃を予定 会場：未定

1.3 第28回製剤技術伝承実習講習会

「経口固形製剤の製造工程の基礎と実際」

2025年1月頃を予定 会場：フロイント産業

2 製剤技師認定事業

- 製剤技師認定委員会

医薬品メーカー等において製剤に携わる研究・開発・製造担当で、日常業務の遂行上必要とされる共通の基礎的かつ専門的事項及び法規・制度の学識を修得している者を「製剤技師」として認定する。過去15回で360名の認定者が誕生している。また、被認定者の学会への入会を推進するとともに、これら認定製剤技師の企業内での職能・役割アップについて相互研鑽を図れる機会の提供を検討していく。

第14回製剤技師認定試験

2025年11月15日 東京／大阪（予定）

3 出版委員会事業

本学会の事業に関連する書籍等の企画編集を行う。

3.1 昨年度に引き続き、薬剤学会フォーカスグループ (FG) の活動に伴う各グループの代表的テーマを総論的にまとめた書籍の企画出版を計画する。

3.2 Pharm Tech Japan, じほう, 「産学連携コンソーシアム (仮称)」の連載を企画する。

3.3 その他、薬剤学に関連した書籍等の出版について検討を行う。

製剤・創剤セミナー担当理事 (山本理事)

1 製剤・創剤セミナー事業

- 製剤・創剤セミナー実行委員会

大学・製薬企業・医療機関などにおいて製剤技術に関わる研究者・学生が一堂に集い、医療・薬剤学に関し、サイエンスとテクノロジーの観点のみならず刻々と変化する時代のニーズも合わせて議論する合宿形式の討論会「製剤・創剤セミナー」の企画運営を行う。

1.1 第50回製剤・創剤セミナー

テーマ 新時代の医療・創薬を支える製剤・創剤

開催日時：2025年9月17日-18日

開催場所：東レ総合研修センター（静岡県三島市末広町21-9）

公開市民講演会事業担当理事 (寺田理事)

1 公開市民講演会事業

- ホームページに一般市民向けの情報を公開する。
- 一般市民を対象とした公開市民講演会を企画・開催する。
- 今期の開催予定は次のとおりとし、オンデマンド配信とする。
- 2025年9月25日（木） 世界薬剤師の日

FG 担当理事（山下理事）

1 FG 統括委員会事業

共通の研究目的等による分野横断的なユニットである各フォーカスグループ（FG）を統括する委員会として、事業・予算の管理を行い、各 FG に対する助言や FG・理事会間のリエゾンを担当する。

FG 統括委員会では各 FG の活動状況を確認し、継続・廃止などの審議を行う。

- 【経口吸収 FG】

薬物の経口吸収に関わる生体膜機能、消化管での移動特性、消化管内の水分量変化、消化管内での薬物や製剤の溶解や析出、体内動態、モデリング&シミュレーション、製剤設計による吸収の改善や臨床開発戦略に至るまでの幅広い領域を統合し、新たな経口吸収研究を開拓する。2024年度は、FG 合宿討論会（10/10-11）、研究討論会（11/7）を企画・運営した。また、他の FG と協力しながら年会ラウンドテーブルセッションの提案も行った。2025年度は年会ラウンドテーブルセッションの提案、他学会でのシンポジウム開催および FG 合宿討論会の開催を検討する。

- 【経皮投与製剤 FG】

経皮投与製剤に関わる最新の知見や技術情報を共有するとともに、経皮投与製剤を取り扱って研究開発に携わっている研究者間で議論する場を提供する。2024年3月には経皮投与製剤 FG シンポジウムを対面形式で実施予定である。また、日本薬剤学会第40年会へ医療用マイクロニードルの医療機器としての評価に関するラウンドテーブルセッションの提案も行った。2025年度は、前年度と同様に経皮適用製剤 FG の開催やラウンドテーブルセッションへの提案だけでなく、必要に応じて他の学会との共催シンポジウムも計画していきたい。

- 【経肺経鼻投与製剤 FG】

吸入剤および経鼻投与剤について、粒子設計や製剤特性評価、開発の基礎研究、製薬会社における開発の実例、投与デバイス開発の動向、薬物動態、治療に関する臨床現場での問題点について意見収集と情報交換を行う場を提供する。2025年2月には研究会を実施し、「Nose-to-Brain 型中枢神経系創薬の現在地～製剤・動態研究を中心に～」というテーマで多様なテーマを対象に情報共有するとともに、深い議論を行う。また、2025年3月の日本薬学会第145年会ではシンポジウム「若手研究者が挑む次世代吸入製剤の開発」を開催し、若手研究者の研究紹介の場を提供するとともに、最新の当該研究領域について意見交換を行うことを予定している。2025年度も研究会を企画し、FG 所属メンバーの情報共有・議論を促していく。

- 【核酸・遺伝子医薬 FG】

核酸医薬ならびに遺伝子医薬の実用化に必須である、核酸医薬・遺伝子医薬の設計、合成、分析、体内動態（ADME）、安定化や標的指向化のための化学的・製剤学的工夫、臨床・非臨床試験、レギュラトリーサイエンスなどを議論する場を提供する。2025年3月の日本薬学会第145年会では、日本薬学会レギュラトリーサイエンス部会と連携し「遺伝子ベクターの開発とゲノム制御技術・疾患治療への展開を考える」と題したシンポジウムを開催する予定である。本シンポジウムでは、薬剤学、ウイルス学、分子生物学、あるいはレギュレーションを専門とする研究者にご登壇いただき、分野横断的な議論を展開する。また2025年5月の年会ラウンドテーブルに向け、「COVID-19 以外の感染症やがんに対する mRNA 医薬の実用化」と題した企画を申請した。この企画は、アカデミアや企業が保有する画期的な創薬シーズや DDS 技術をいかにして社会実装するか、産官学一体となって将来の成功に向けた議論を展開するものである。他学会にも活動の幅を広げ、我が国発の核酸・遺伝子医薬の研究開発推進に繋がる活動を継続的に行っていく。

- 【薬物相互作用・個別化医療 FG】

本 FG では、創薬研究者（基礎・臨床開発）・臨床薬剤師・審査サイドなど種々の立場から広く意見を求め、交流する場を提供し、薬物相互作用及び個別化医療に関して科学に基づいたコンセンサスを得ることを目標とする。そのためには、継続的に FG メンバーが核となって一同に会して議論できる場を提供すべきと考えており、2025年度も引き続き日本薬剤学会年会におけ

る活動のみならず他学会との交流を積極的に行いながら、共催シンポジウム（日本医療薬学会、日本臨床薬理学会、日本薬学会等）の開催を積極的かつ継続的に行っていく。また、新しい試みとして、国際的な薬剤学の潮流を本学会メンバーと共有するために、グローバル製薬企業やアカデミアの研究者を招いたオンライン研究教育セミナーを実現したいと考えている。

- **【医療 ZD と完全分業 FG】**

薬剤師が医師処方箋のレビューを含めた真の調剤を実践し、そのリスク管理により医療における Zero Defect が達成されるよう、医薬分立を基盤としたシステム・教育の構築を目指す。

- **【DDS 製剤臨床応用 FG】**

本邦発の DDS 製剤の臨床応用に向けた課題について、産官学の垣根を越えて議論できる場を設ける。本年度は、以下に示す活動を実施できるように準備を進めていく。①本学会第 40 年会ラウンドテーブルセッション（企画応募済）「細胞外小胞の医療応用に何が必要なのか」というテーマで議論する。②第 12 回目となる合宿討論会（場所：帝京大学箱根セミナーハウス、日程：11 月予定）事前に FG 登録メンバーに討論したい内容についてアンケート調査を行い、テーマを決定し、DDS 製剤の臨床応用と最先端の研究課題に関する議論を深める。また、参加者の様々な経験や知識を共有化する場を提供する。③日本薬学会第 146 年会公募シンポジウム（2026 年 3 月下旬）DDS 製剤の臨床応用に関するトピックのシンポジウムを企画する。

- **【物性 FG】**

医薬品原薬、製剤原材料ならびに製剤の物性評価技術にフォーカスをあて、技術の発展や創薬/創剤への展開についての議論・提言を行う。今年度は、医薬品原薬・製剤の熱分析に関する最新技術を取り扱うセミナーを 2 月に現地で開催する。また、日本薬剤学会第 40 年会にて DX やデジタルツールに関するラウンドテーブルを開催予定である。さらに、若手研究者の研修・啓発・育成のために、物性に関する伝承実習講習会のサポートを行う。また、固体医薬品の物性評価に関する英語版書籍の製作を検討する。

- **【臨床製剤 FG】**

臨床製剤関係シンポジウムの支援、日本医療薬学会をはじめとした他の学会との合同セミナー、FG のメンバーでの集合研修や院内製剤をテーマにした病院薬剤師向けのセミナーの開催を企画する。また、日本薬学会および日本医療薬学会において共催シンポジウムを行うなど関連する学会との連携を深めていく。加えて、日本医療薬学会 2023 年度医療薬学術小委員会との協同を進め、臨床製剤の市販化の促進のための活動を進める。これらの活動を通して臨床製剤 FG の活動を広報するとともに、個別化医療を支援する新規な臨床製剤開発を目指す。また、国際薬学連合（FIP）との連携を深め、国際的な認識との調和を図る。

- **【超分子薬剤学 FG】**

超分子とは、複数の分子が共有結合以外の結合により、秩序だって集合した分子のことをいい、薬剤学領域でもリポソーム、細胞外小胞、多糖類、アルブミンなど多数存在する。学問として理工学領域主体の「超分子化学」と「薬剤学」との融合による「超分子薬剤学」を立ち上げ、次世代の薬剤学を創製することを目的に活動していく。2025 年度は、昨年度に引き続き、超分子薬剤学と IT の融合を目指した活動を継続し、日本薬学会第 146 年会における公募シンポジウムに応募するとともに、第 4 回超分子薬剤学 FG シンポジウムを開催する。これらの活動を通して超分子薬剤学 FG の活動を広報するとともに、新規な超分子製剤開発を目指す。

- **【小児製剤 FG】**

小児製剤に関する課題は AMED レギュラトリーサイエンス研究班、チャイルドライフスペシャリスト、小児薬物療法研究会などと協力して調査・抽出してとりまとめ、学会誌などを通じて発信する。また業界団体の意見としてまとめるべき案件は、製薬協とも協力する。調剤における課題ならびにビッグデータからの小児製剤の課題抽出は「臨床製剤 FG」と連携し解決にあたる。一方、国際的に共通するテーマについては、関連する EuPFI（欧州小児製剤コンソーシアム）の Workstreams の定例会に参加して情報交換を行い、適切な団体や研究者と協力して課題解決を図る。小児製剤研究会を毎年 2 月に開催し、小児製剤の課題・技術・レギュレーションについて薬剤学会会員および小児医療関係者と共有を図る。

- **【デジタル製剤学 FG】**

人工知能に代表される各種 informatics, 数理モデリング, さらに量子化学・分子動力学・流体力学計算に代表される分子・物理シミュレーションなどのデジタル技術と製剤学分野の融合領域

について、最新知見を集約・共有し、本分野の推進・発展に資する提言ならびに議論を行う。2025年3月の日本薬学会 第145年会にて、シンポジウム「医薬品開発を加速する CMC・製剤研究 DX – 最先端研究と産産・産学共創モデル –」と題したシンポジウムを開催する。また、2025年12月には第3回主催シンポジウムを開催し、医薬品開発の基幹工程となる製剤開発・CMC分野のDXについて議論する予定である。なお、2024年5月の日本薬剤学会第40年会ラウンドテーブル「CMCの革新的合理化：プロセス・マテリアルズインフォマティクスが拓く未来像」を企画申請しており、CMC領域へのデータ駆動型アプローチの応用について議論する。加えて、2025年春頃、株式会社じほう Pharm Tech Japan 誌にて、当FGの紹介を含めたインタビュー記事が掲載される予定である。

2 製剤設計における種差の問題検討会（略称：製剤種差検討会）事業

2016年度に発足した製剤種差検討会は、入会した会員（団体）が製剤設計における種差の問題に関する経験事例の報告を行い、種差が影響する要因について皆で討論し整理することを目的としている。具体的には年に数回、東京地区と京都地区で交互に対面による事例報告会を開催してきたが、コロナ禍の影響により、2020年1月の事例報告会以後は休止状態となっている。2025年度は2回事例報告会を再開したい（第10回は京都地区、第11回は東京地区交互）。さらに、本検討会の将来的な活動方針・方向性について世話人会を中心に議論を進める。

制度改革担当理事（柳井理事）

1 制度改革担当事業（制度改革委員会）

- 制度改革委員会

現行制度を絶えず検証し、公益社団法人として、持続性のある制度とする。

公益社団法人として主体的で統制された本学会の運営体制を構築し、理事会が学会事務局と業務委託先（学会支援機構、公認会計士）を統括管理できる体制とする。また、規程等と事業との整合性を確認し、必要に応じて見直しを提案する。更に、理事会における本事業の検証を推進する。

具体的には、

- (1) 会員規程や職員規程の見直しなど規程の見直しを行う。
- (2) 個人情報保護規程について整備を行う。

年会長（深水第40年会長）

1 年会事業

- 年会組織委員会

本学会最大の学術集会「年会」の企画運営を行う。年会では、口頭およびポスター発表による一般講演の他に、特別講演および各種の受賞講演による啓発活動、シンポジウムやラウンドテーブルでのディスカッションを通じて参加者の研鑽事業を行う。また、企業や関連機関のランチョンセミナーや企業展示会など、多彩なプログラムにより、産学官の連携を深めている。なお、定時総会もこの会期中に併催される。

1.1 第40年会

「Patient-centric に臨・産・学・官が協奏する薬剤学」

2025年5月22-24日 場所：TFTホール（東京都江東区有明3-4-10）TFTビル西館2階
本年会では薬剤学会の創立40周年を記念する講演およびシンポジウムを企画している。

学会運営（会長、事務局）

1 理事会

学会の業務執行の決定、理事の職務執行の監督等を行う機関であり、全ての理事で組織される。法人のガバナンスを担う中心的な機関である。今期の開催予定は以下のとおり。

第1回理事会	2025年4月頃
第2回理事会	2025年5月22日
第3回理事会	2025年9月頃
第4回理事会	2026年1月頃

2 定時総会（代議員総会）

2018年度より代議員による定時総会が行われている。本年度は2025年度～2026年度の代議員による総会が開催される。本会は定時総会として社員総会に位置付けられ、正会員で構成される学会の最高の決議

機関である。今期の各開催予定は次のとおり。

2.1 定時総会 2025年5月22日（13:45-14:30）オンライン形式 場所：TFTビル（有明）

3 年会実施計画（次年度以降）

第41年会（2026年度）以降は年会長を中心に実施計画に基づき準備を進める。

3.1 第41年会（2026年度） 藤田卓也 年会長

3.2 第42年会（2027年度） 川上亘作 年会長

4 その他

2025年度における資金調達及び設備投資の見込みはなし。

以 上

収支予算書(損益計算ベース)
2025年4月1日から2026年3月31日まで

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

科目	公益目的事業会計	法人会計	合計
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	0	200	200
基本財産受取利息	0	200	200
特定資産運用益	0	318	318
特定資産受取利息	0	318	318
受取会費	10,740,000	10,740,000	21,480,000
正会員	6,050,000	6,050,000	12,100,000
学生会員	810,000	810,000	1,620,000
賛助会員	3,880,000	3,880,000	7,760,000
事業収益	49,004,980	0	49,004,980
学術集会・委員会等事業収益	46,032,980	0	46,032,980
参加費	25,871,100	0	25,871,100
意見交換会費	5,029,880	0	5,029,880
助成金・補助金	150,000	0	150,000
寄付金・協賛金	1,249,000	0	1,249,000
セミナー共催金	4,500,000	0	4,500,000
講演要旨集等販売料	0	0	0
広告料	948,000	0	948,000
出展料	8,285,000	0	8,285,000
学会誌等出版事業収益	420,000	0	420,000
購読料	400,000	0	400,000
投稿料・別刷料	10,000	0	10,000
許諾料・使用料	10,000	0	10,000
広告料	0	0	0
学会賞等表彰事業収益	1,562,000	0	1,562,000
助成金・補助金	0	0	0
寄付金・協賛金	0	0	0
指定正味財産からの振替	1,562,000	0	1,562,000
製剤技師認定事業収益	990,000	0	990,000
受験料	660,000	0	660,000
認定料	330,000	0	330,000
雑収益	0	280,100	280,100
雑収益	0	280,000	280,000
受取利息	0	100	100
経常収益計	59,744,980	11,020,618	70,765,598
(2) 経常費用			
事業費	71,044,255		71,044,255
給料手当	8,800,000		8,800,000
臨時雇入金	6,413,600		6,413,600
法定福利費	1,160,000		1,160,000
会場費	14,818,444		14,818,444
旅費交通費	5,369,000		5,369,000
会議費	1,936,300		1,936,300
意見交換会費	5,184,500		5,184,500
賞状・賞牌・副賞費	2,485,000		2,485,000
通信運搬費	1,622,856		1,622,856
ウェブサイト管理費	2,927,250		2,927,250
消耗品費	1,690,500		1,690,500
減価償却費	0		0
印刷製本費	5,472,930		5,472,930
貸借料	1,688,080		1,688,080
保管料	140,000		140,000
諸謝金	4,056,800		4,056,800
租税公課	0		0
支払負担金	1,995,000		1,995,000
業務委託費	4,349,075		4,349,075
雑費	729,920		729,920
管理費		8,026,520	8,026,520
給料手当		2,200,000	2,200,000
法定福利費		290,000	290,000
旅費交通費		330,000	330,000
会議費		65,000	65,000
通信運搬費		1,400,000	1,400,000
ウェブサイト管理費		272,000	272,000
消耗品費		350,000	350,000
印刷製本費		125,000	125,000
貸借料		414,520	414,520
租税公課		1,000,000	1,000,000
業務委託費		440,000	440,000
公認会計士報酬		990,000	990,000
雑費		150,000	150,000
経常費用計	71,044,255	8,026,520	79,070,775
当期経常増減額	-11,299,275	2,994,098	-8,305,177
当期一般正味財産増減額	-11,299,275	2,994,098	-8,305,177
一般正味財産期首残高	21,800,572	18,467,853	40,268,425
一般正味財産期末残高	10,501,297	21,461,951	31,963,248
II 指定正味財産増減の部			
受取寄付金・助成金	1,500,000	0	1,500,000
一般正味財産への振替額	-1,562,000	0	-1,562,000
当期指定正味財産増減額	-62,000	0	-62,000
指定正味財産期首残高	894,230	20,000,000	20,894,230
指定正味財産期末残高	832,230	20,000,000	20,832,230
III 正味財産期末残高	11,333,527	41,461,951	52,795,478